

## 平成30年度 若草幼稚園自己評価

若草幼稚園の平成30年度における自己評価は以下のとおりである。

### 1 保育の計画性

園の保育文化（遊び、一斉活動、行事）が安定していることによって、新人保育者もそれに応じて保育を営むことができた。園の同僚性の高さが確かめられた一年だった。しかし、新人保育者の計画性という点では、彼らにとっては、すべてが新しい出来事であるため、見通しを立てること、計画を立てることは非常に難しい面があった。一日一日を無事過ごしていく中で、次第に見通しを持てるようになっていったが、全体としては、不十分な点が目立った。

それにおいて、ペアを組む主任の新人保育者理解、導き方に関する課題も浮き彫りになり、今後の園を支えていく重要な課題となった。大妻女子大学の岡教授の指導の下、今後研修を積み重ねていく予定である。

### 2 保育の在り方、幼児への対応

遊びと一斉活動のバランスを意識できた一年であり、特にカリキュラムとして、どの時期にどのような活動を取り入れるとよいのか、考えながら保育を展開することができ、次年度へと大きくつなげることができた。また、遊びから立ち上げていく行事の在り方、教材の工夫、計画的な環境の構成について自覚的な保育を展開することができ、保育の質の向上を実感できる年となった。

ただ、幼児理解について、大きな課題を持った一年となった。特に、感覚の異なる加配児の立場に立つことの難しさを各々保育者が自覚する必要がある。また、幼児理解の視点となる、個性の把握、発達理解、遊び理解、教材理解など、プロとしての保育理解も不十分である。

### 3 教師としての資質や能力・良識・適性

特に新人保育者について、個にかかわること、集団を動かすことについての優先順位を定めることができず、クラス運営において副担任の負担が多い年だった。それでも、半年たつとそれなりにリズムをつかむことができ、子どもとの生活を安定的に送ることができるようになった。

「わからないこと」がわからない新人保育者と、「どこまでわからない」か分からないその他の保育者との間で、情報を共有したり、作業を進めていくことに苦労し、その中で、何を言語化して伝えていくべきなのか、考えさせられた。

子どもに対する真摯な思いは、どの保育者にも感じられる。経験を積んでいく中で、援助、環境の構成のストックを増やし、専門性を高めていくことが求められる。

#### 4 地域の自然や社会とのかかわり

保幼少連携事業において、小学1年生と年長児の合同授業を行った。連絡がうまく行かず、あまり計画的にはできなかったが、勉強しかしなないと思っていた子どもにとっては、楽しみにできるよい機会となった。

すくすくの森の整備では、専門家の手をかりて、里山保全と教育環境の両立を推し進めることができた。

地域連携協議会の役員や、地域の防災、人権イベントに協力していくことを通して、地域に根づいた活動を進めることができた。

#### 5 研修と研究

公開保育において、日ごろの実践を十分に発揮でき、子どもの生き生きとした姿を見ていただいたことが、大きな励みになった。研修についても、各人が積極的に取り組み、保育の糧としている様子がわかる。来年度は、若草幼稚園を出て、外の世界に目を開いていく機会を取っていきたい。